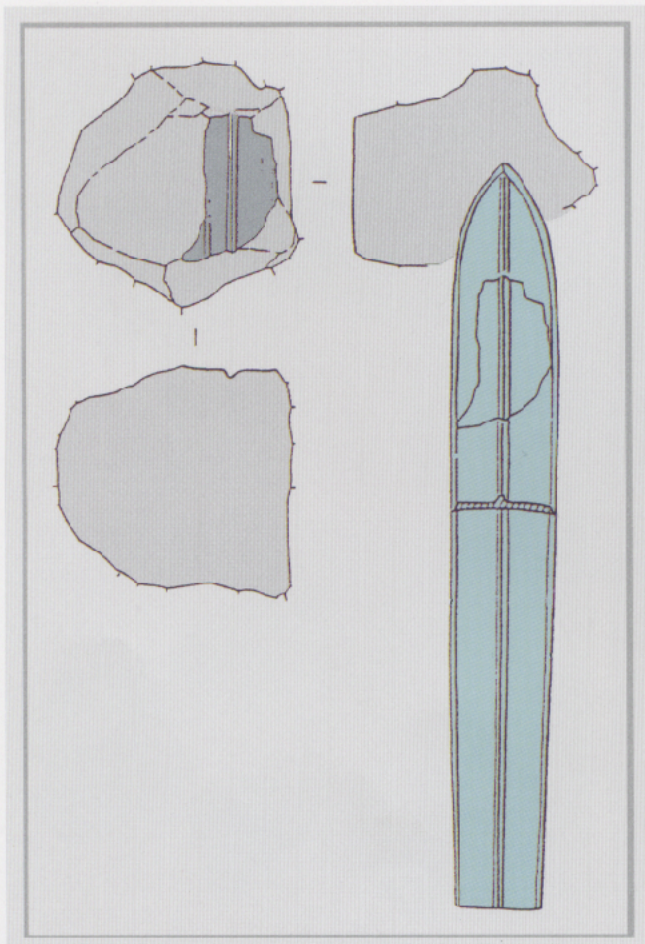


青銅器ヤリガンナの^{いがた}鑄型

鑄型の破片は、環濠集落北西部の内濠に堆積した黒色粘質土から前期後半の土器と共に出土した。材質は砂岩で、縦6.5cm、横6.0cm、厚さ6.1cm、握りこぶし位の大きさである。残っていた鑄型面は縦の長さ4.0cm、横幅2.5cmで、真中には幅0.25cm、深さ0.2cm、断面形V字を呈するヤリガンナ特有の隆条帯^{りゅうじょうたい}が1条縦方向に彫り込まれている。左右端部はわずかに内弯気味となっているが、端部は破損していて形状は不明である。彫り面は強い熱を受けて黒変し、実際の鑄造に使われたことを物語っている。

残っている鑄型面、あるいは北九州などで出土しているヤリガンナの形状から、その大きさを復元すれば幅3cm、長さ20cm位になると考えられる。なお、このヤリガンナの鑄型として用いられている砂岩の破片は、ヤリガンナのみを鑄造するために彫り込まれたものとしては、幅・厚さが大きく、別の鑄型を再利用した転用材と考えられる。このほか、ヤリガンナの鑄型と同じ様に黒変した鑄型と考えられる砂岩片が1点出土している。



ヤリガンナの鑄型(上)と推定復元図(左)

堅田遺跡以外でヤリガンナの鑄型としては、福岡県庄原遺跡^{しょうばる}、佐賀県土生遺跡^{はぶ}から各1点ずつ出土している。時期は、弥生時代中期の初め頃のものである。また、ヤリガンナの実物は九州北部で10例、このほか朝鮮半島から17例ほどが出土している。